

私の剣道歴

五等 昭和十八年
四等 昭和十九年

三等 いざれも東条英機大日本武德會長の時

四段 昭和二十五年 鶴田三

旗熊本縣劍友会連合會會長の時

五段 昭和三十年 木村篤大
郎全日本剣道連盟會長の時

六段
七段
昭和四十六年
平成五年

一
馬
立
成
五
金

(全日本剣道連盟が発足する前の珍しい証書の写真を掲載します。浦田先生のもので
す。)

七年ほど前に九十六歳で亡くなられた井上正孝範士八段の著書『剣道いろは論語』(体育とスポーツ出版社)に、標記のテーマを説いて次のくだりがある。曰わく「剣道の稽古は自分より強い者にかかり、自分の最も苦手とする者を選んでやらなければ強くもならなければ上手にもならない」という修行の心がけを教えたものである。普通の稽古風景をみても強くなる者はやっぱり自分から積極的に強い先輩にかかり、自分が最も苦手とする相手を選んで懸命に頑張っている。それに引き換え何年たつてもうだつの上がらない者は日頃の稽古が常に逃げ腰であり、自分より弱い者ややりやすい者ばかりをつかまえて道場の片隅でほいほい稽古をやっている。これでは何年経っても一線突破はできまいし、強くもならないければ上

あるとも言える。しかし、どん
なお相手でも自分勝手な、独
りよがりの攻めで一本が取れ
るほど剣道は単純ではない。
攻めを効かせて攻勢をかけよ
うとしても、お相手もさる者
気をはずしたり、裏をとつた
り、拍子を変えたり、手をこ
まねいているといきなりポン
と打ってきたりする。剣道と
はなかなかうまく思うように
はいかないものなのだ。そこ
に我が心を鏡のように明らか
にして恐懼疑惑の四病を取り
払い、澄み切った心で無心の
一本を求める稽古が必要にな
なつてくるのだ。そのためには
自分の心を惑わしてくれる
苦手ほど自分の為になる稽古
相手はいないと言える。相性
のよいお相手に何百本打ち込
んでも大した力は付かない。
体力と慢心が付くだけだろう。
その点苦手なお相手に対しても
「ああでもない、こうでもな

至らぬところも沢山ある。それをその都度反省し、二度とこんな失敗はくり返さないぞと心に誓う。そこに上達があり技の洗練がある。そのくり返しによつて心も磨かれ腕も上達する。さらに今度は反対に相手から打たれたら「こん畜生」ではなくて「有難う」の感謝で、打たれたあとをよく検討し、「ああここだ」『相手のあの攻めに対して退いたから打たれたのだ』といちいち反省し、その欠点を教えてくれた相手に感謝しなければならない。その反省と感謝の練り合いで心を鍛え、技を磨いてくれるのである。「とある。これ以上の説明は不要だろう。剣道が人間形成の道であるゆえんがよく表れた教えである。打った方はお相手が「参った」と頭を下げても、「いいやまだまだ」と謙虚に振り返り、驕ることなく

昨年度の昇級審査会から
「木刀による基本技稽古法」
が受審者に課せられるようになつた。天草剣道連盟として
も数年前から數度の講習会を開いて指導されてきた。
法を学んでもらってきた。それを受けて各剣道道場、剣道
クラブでも子ども達に指導されてきた。また昇級審査の前
の午前中に講習会を開いて練習させることにした。本連盟
の審査では、三級合格者に四本まで、二級合格者に六本ま
でが課されており、稽古法の理解や正確さにおいては不十分な面は見受けられるが、所作、技の順番、大まか
な太刀筋などはそつなく演じられてゐるようだ。今後さら
に講習会を重ねて指導者の指導力の充実を図り、ひいては
子ども達の稽古法が正しく力強いものになり、それがとり
もなおさず竹刀剣道の力をつける

木刀による剣道基本技 稽古法について

けることに繋がらなければならぬと考へる。今回「木刀による基本技稽古法」についておさらいをしてみたい。

まず「制定の趣旨」から。

「剣道の基本技術を習得させ

稽古はお相手があつて初めて初めて
できるのだということを忘れてはならない。また打たれたれた
方は、打たれるということは自分
の悪いところを教えてもらつたのだと、打つたお相手
に感謝する。これが剣道の道
たる所であろう。昔の剣道家
中村彦太郎という人の作にこ
んな道歌がある。剣術を遣う
人ほど馬鹿はなし、頭叩かね
礼を言うなり。剣道の稽古の
在り方をよく表してお興味大
深い。またよく言われる言葉
に、勝ちに不思議の勝ちあり
負けに不思議の負けなし、と
いうのがある。どのようにし
てあのお一本を取ったのか思い
出せないほどの集中と無心の
境地が得意即妙の会心の一本

を生むのであり、剣友諸氏も
そのような経験がおありと思う。誰でも願わくは度々そん
な一本を打ち込みたいが、昨日
できた事が今日出来ぬのが
剣道。鍊磨あるのみか。また
打たれた方は、負けを喫した
のは必ず自分の方に心技体に
於いて至らぬ所があることを
知れ、という教えだろう。何
にしても剣道には謙虚さが求
められるようである。打てば
嬉しい、打たれれば悔しいの
は人の常。しかしそこから一
歩踏み出して自分の稽古を見
直すことが、我々の剣道を心
映えるものにし、究極の目
的である人間形成の道へとつ
ながっていくのかも知れない
共に鍊磨ありたい。

